

# 多気郡神前山古墳について

## ——三重県主要古墳基本調査5——

原始古代史部会

### 一、はじめに

三重県においては、これまでに数多くの古墳の所在が明らか  
にされているが、時間的制約・調査人員の不足などの理由から  
大部分は詳細な調査が行われていない。こうしたうちにも、こ  
れら古代遺跡は、近年の急速に展開されている国土地理院など  
より、日に日に取壊せられ詳細な調査が行われぬまま、に消滅し  
ているのが現状である。

この様な事態に対して、我々に残された問題は、これら古代  
遺跡の現状を少しでも正確・詳細に把握し、この極めて非生産  
的な古代史研究を、より豊かにすることにある。この様  
なわけで、我々は一九六二年に行つた一志郡境野町所在の筒野  
前方後方墳を区切りとして、県下主要古墳基本調査を開始して以  
来、今では六七回目を向えるに至つたのである。

本神前山古墳より出土した古文書・神歌鏡は、梅原 治博士の  
編集による『古鏡図鑑』（黒川古文化研究所526刊）の図版才  
314に挙げられ、この鏡は六朝時代前半に属する銅鏡であ  
るとされている。このほかに本鏡についての記載は古くから多く  
、富岡謙蔵氏の『日本出土の支那古鏡』『古鏡の研究』、後藤

守一氏の『漢式鏡』などがある。注①

この様な優れた遺物を出土した古墳であるにもかゝらず、  
その正確な調査はされておらず、ただ、名古屋大学の澄田正一  
氏・九州大学の岡崎敬氏・三重大学の阪部貞蔵氏により、昭和  
三十四年八月、右の発掘地点を知る唯一の老人である故橋貞慶  
之助氏の先導のもとに、その遺物を出土した古墳の所在地の確  
認がされたに過ぎなかつた。注②

そこで、我々は一九六二年以来、毎年行つてきた三重県主要  
古墳基本調査の一つに本古墳をとりあげたのである。

この神前山古墳の現状調査、並びに測量は本年一月七・八の  
両日を中心に、村上喜雄・沢生悦生・長谷川澄男・磯部昌男・  
海野彰が行つたのである。

### 二、位置並びに現状

本古墳は、行政的には三重県多気郡明和町大字上村小字山シ  
バに属している。明和村は昭和三十三年、三和町と斎明村が合  
併して出来た地区で上村はもとが多気郡斎宮村の一つの大字で  
あつた。

本古墳の立地する丘陵の麓に広がる沖積平地は柳田川によつて形成されたものである。柳田川は紀伊山脈の北を限る断層谷に沿つて東流している。柳田川は水源を高見山の南東麓に発し、森村に至つて南東から注入する蓮川を合せて積水量を増し、相可、射和の間を経て神山の南東で、被川を分流し、本流は黒部に至つて伊勢湾に入つてゐる。本古墳は、柳田川と被川が分岐する地点より東に約ニキロのところにあり、被川の南岸に突出した才三紀の独立丘陵の一突端の頂上部に営まれた円墳である。本古墳の営まれた丘陵一帯は神前山と称され、全二十三基の古墳が営まれており、それらは神前山古墳群といえるであろう。本古墳群の付近には、坂本古墳群（地図番号A・六基）明星古墳群（B・十一基）奇宮池古墳群（C・一六基）池上村古墳群（D・三十八基）天皇山古墳群（E・二十三基）大塚古墳群（F・一六基）塚山古墳群（G・一二基）などのほか、天皇山遺跡・城山遺跡・有木町野遺跡・天垣外遺跡など弥生時代の遺物包含地も多く存する。又、この地方は、それの諸遺跡が立地する山麓線の前面において、今なお農業生産の基調をなす条里制が、かなり広汎に施行され、かつ古いままの地割が存続してき

### 三、神前山古墳について

#### (一) 神前山古墳の概観

本古墳群は、前述の如く、柳田川より被川が分岐する地点より東に約ニキロ、被川の南岸に突出した才三紀に属する比高三十メートル内外の独立丘陵の頂部全体に築かれている。分布調

神前山古墳群 規模表

号	規 NSXEW	模 高(最高)	号	NSXEW	高(最高)
1	24×23	3.5	13	11.5×7.5	1.5
2	15×15		14	13×13	1.5
3	8.5	1.0	15	10	1.0
4	6.0	1.0	16	10.5	1.5
5	10.2		17	NW×SE 8.5	1.0
6	10.5	1.0	18	13×12.6	1.5
7	10.6	2.5	19	17×12	1.5
8	7.0	2.0	20	10.5×12.5	1.5
9	8.5×7.0	1.5	21	9.5×8.5	1.8
10	12.5	2.5	22	18	1.2
11	7.0	1.0	23	14×11.0	1.8
12	8.0	1.5			

査の結果によれば、本古墳群は計二十三基（推定古墳二基を含む）の古墳から形成されており、本古墳群の中で、さうに五つのグループに分けられると考えられる。即ち、一つは尾根の最高所である中央より、や、北よりの幾分平かな部分に主墳（仮一号）を含む七基の古墳が、丘陵の東麓には三基、南斜面には六基、南西斜面には同じく六基（内一基は推定）、丘陵北麓には推定であるが一基の古墳が認められる。なお遺物に關しては、主墳以外現在のところ判明してない。

(二) 主 墳 (仮称一号)

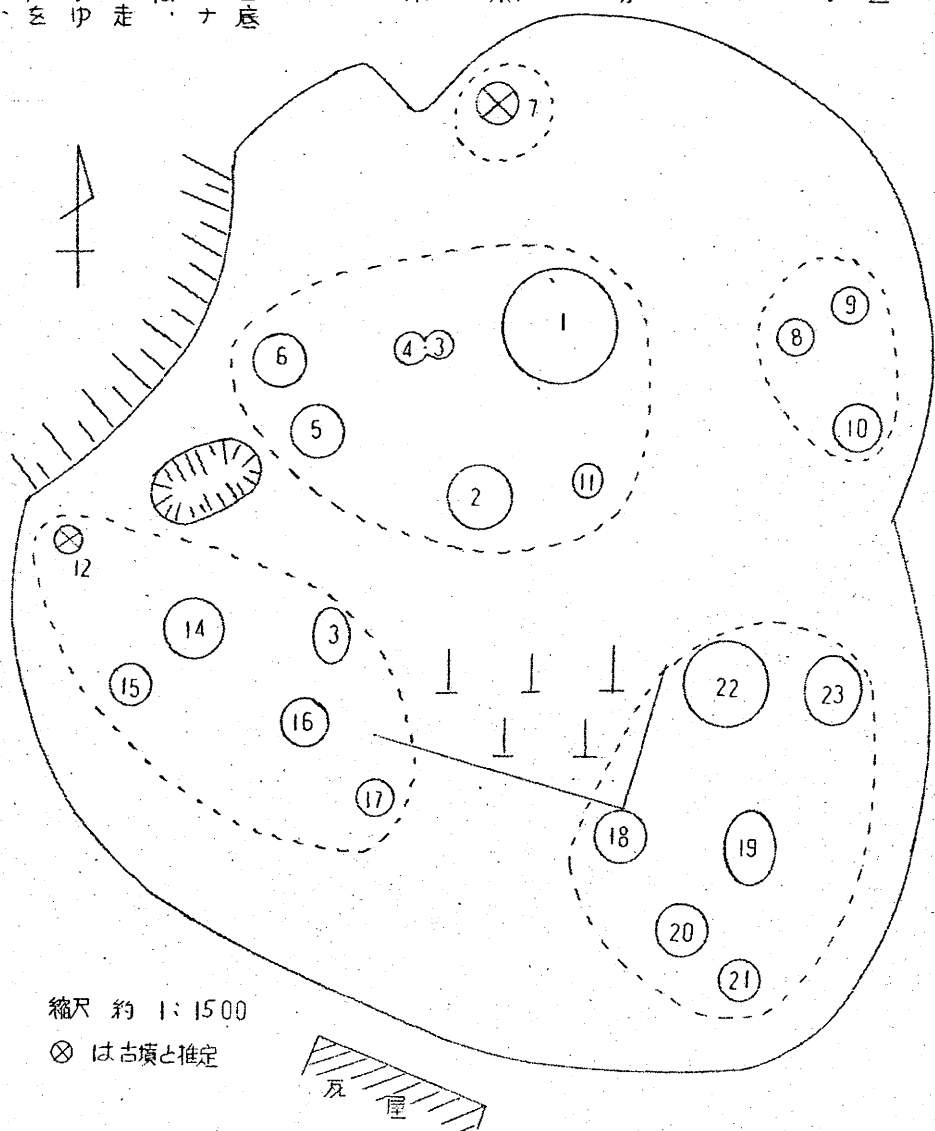
(1) 廣 丘

本古墳は、丘陵中央より傾斜が北へゆるやかに下るところに位置している。本古墳の頂上は盗掘坑があり、付近は礎石が散乱している。一方、この神前山古墳の頂上に立てば、櫛田川と宮川との間に展開する伊勢平野南部の沖積地をよく見渡せるばかりでなく、伊勢湾の海上をはるかに遠望することができる。

本古墳の径は南北二十四米・東西二十三米、墳丘は最高所で三・五米さばかり、墳頂には南北十米・東西五米・深さ一米の口状空室するかなり大きな盗掘坑があり、数個の礎石が見られる。

測量図がわかるように、基底線は、墳丘北側では等高線のマイナスイ・五〇と四・〇〇、南側では二・〇〇と二・五〇のほぼ真中を走っている。北側では傾斜が北からゆるやかにのぼり、や、平坦な部分を残して、墳丘が盛りあがっており、

— 神前古墳群分布図 —



墳丘の南側では基底線の周囲に一部凹地を呈し、そのあと傾斜はゆるやみに南へのぼり、その最高所に二号墳を築いている。墳丘南側の凹地は墳丘築造の際、この部分の土を盛りあげたことを示している。

## (2) 外部施設

外部施設としては現在までのところ青石と思われる二十程前後の礎石が数ヶ所に見られた。埴輪はまだ発見されるに至っていない。

## (3) 内部構造と遺物

内部構造については現在のところ全く不明であるが、遺物については黒川古文化研究所に細められている屈文帯神獸鏡一面のほか二面の屈文帯神獸鏡・勾玉・直刀・陶器・土器などの遺物がある。

黒川古文化研究所に納められている屈文帯神獸鏡については前述の如く、多くの記載が残されているが、梅原未治氏の『古鏡図鑑』によれば、鏡は径二〇・三程をばかり、縁縁の多いうちに白銅の地肌が見られ一部には朱の染みが見えとめられる。内区には一方より見られるように上下左右に神仙像が浮彫りされており、四乳をめぐって竜虎が表現されている。そのような内区の外周と外区との間に半円方形帯があり方格内に

吾作明竟 幽津三商 配像万璽  
 競從序道 敬奉賢良 周刻典記  
 百身長来 衆事主陽 福祿光明  
 富貴安来 子孫蕃昌 賢者高顯  
 士至公卿 与師命長

という銘を入れている。又この鏡背文より、本鏡が六朝時代前半に属するものであることがわかる。  
 『近畿古文化論』によれば、この鏡と同式と思われるのに神島の八代神社に納められている屈文帯神獸鏡・愛知県岡崎市丸山町字龜山にある県立種畜産場の構内より発見された屈文帯神獸鏡がある。

前者は、径二〇・九程をばかり鏡背文の示すところが神前山古墳から発見されたのと同じであり、後者は、径二〇・五程を

ばかり、その鏡背文の構成はさきの神島例・神前山のそれと同じような型式を示している。

以上のことより、伊勢・神島・三河をつらねた古墳出土の古鏡のうち、これら三面の屈文帯神獸鏡のもつ意味が今後の大変興味深い問題となる。

## 四、おわりに

神田川流域一帯には、縄文時代から古墳時代にかけての遺跡が極めて多く見られることと、これまでの調査により判明している。又、本流域一帯は雲出川流域一帯と並んで伊勢河内岸において鏡の発見数極めて多い地域であり、数々の屈文帯鏡も発見されている。本古墳から発見された屈文帯神獸鏡もその一つであり、

	墳形	鏡の径	鏡以外の出土遺物
神前山	円墳	20.3 20.9	勾玉・直刀・陶器・土器
神島		20.9	
龜山	円墳	20.5	礎石・鉄直刀・鉄製太刀・須恵質の円筒埴輪

内行花文鏡×三角縁神獸鏡と並んで四世紀から五世紀にかけての伊勢湾沿岸と畿内との政治及び文化の關係を説明するのに重視されている。

又、この地城における画文帯神獸鏡出土古墳は、本古墳のほかに四基報告されている注③(表一)

しかし、これより画文帯神獸鏡はいずれも十六種内外で、本古墳出土の画文帯神獸鏡と比べると小型である。画文帯神獸鏡を出したこの地城の古墳の外形については、松阪の坊山と本古墳と共に円墳であることから、この時期の画文帯神獸鏡を出す古墳の外形が円墳であるという一つの興味を引く。

本神前山古墳は鏡を出す他の古墳に比べて決して大きいものではない。

古墳名	所在地	古墳外形	鏡(径cm)
塚越	鈴鹿市片岡町	円墳(?)	17.57
坊山	松阪市下村字坊山	円墳	15.06
中井	志摩郡大玉町	-	15.5
高塚王塚	上野市喰代字高塚	-	14.57

(表一)

しかし下り、規模(表二)立地・遺物の点から、当時、その被葬者たる豪族がこの地城において相當な政治的・社会的・宗教的権力をにぎっていたと思われる。

以上、本古墳の調査の結果判明したことを少々かいつま述べてきたが、今回の調査により今まで全四基と報告されていた古墳が全二十三基であることが明らかにになったことも大きな成果であった。

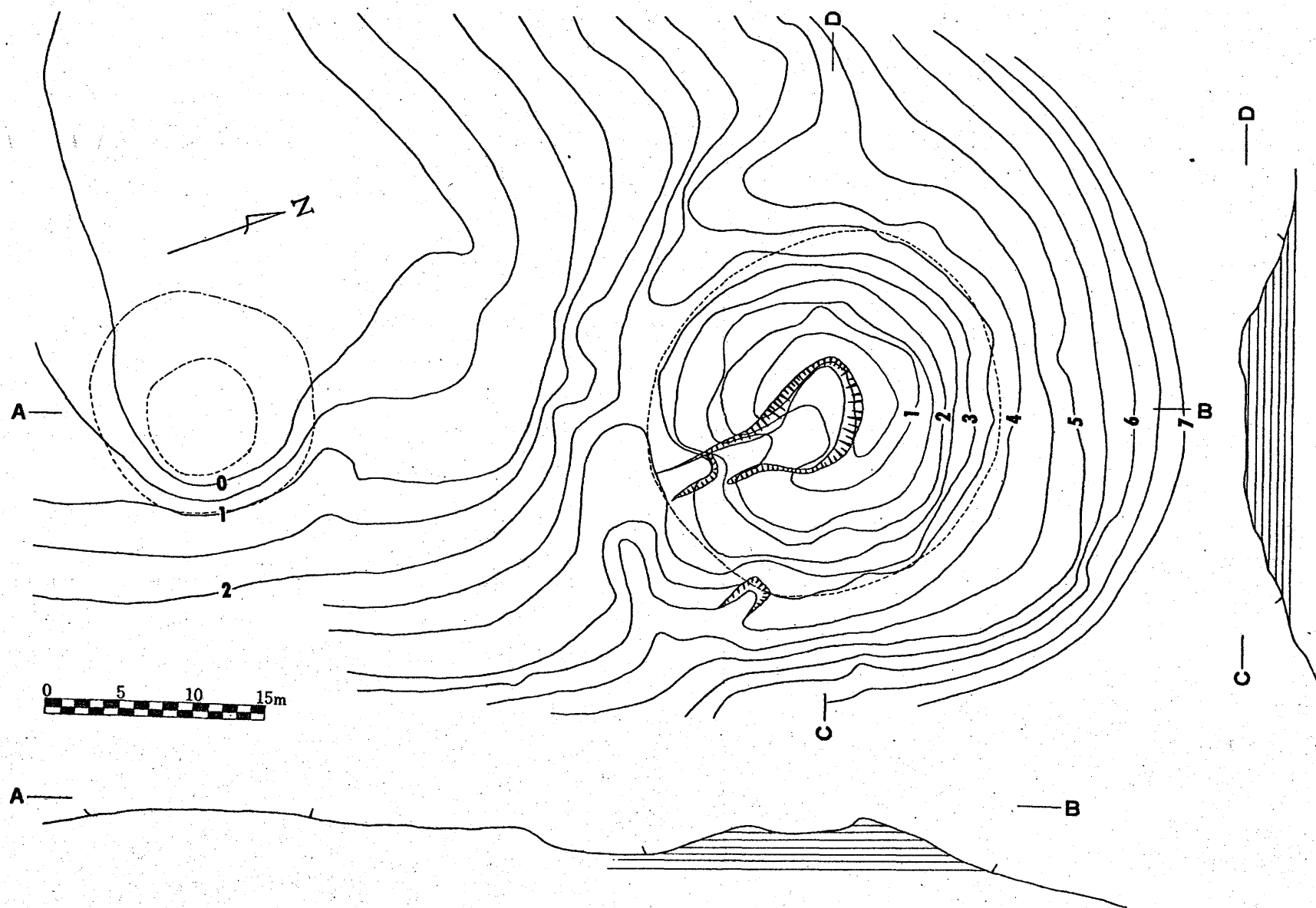
尚本古墳測量に際して御協力を願った明和町役場・伊勢場の松田

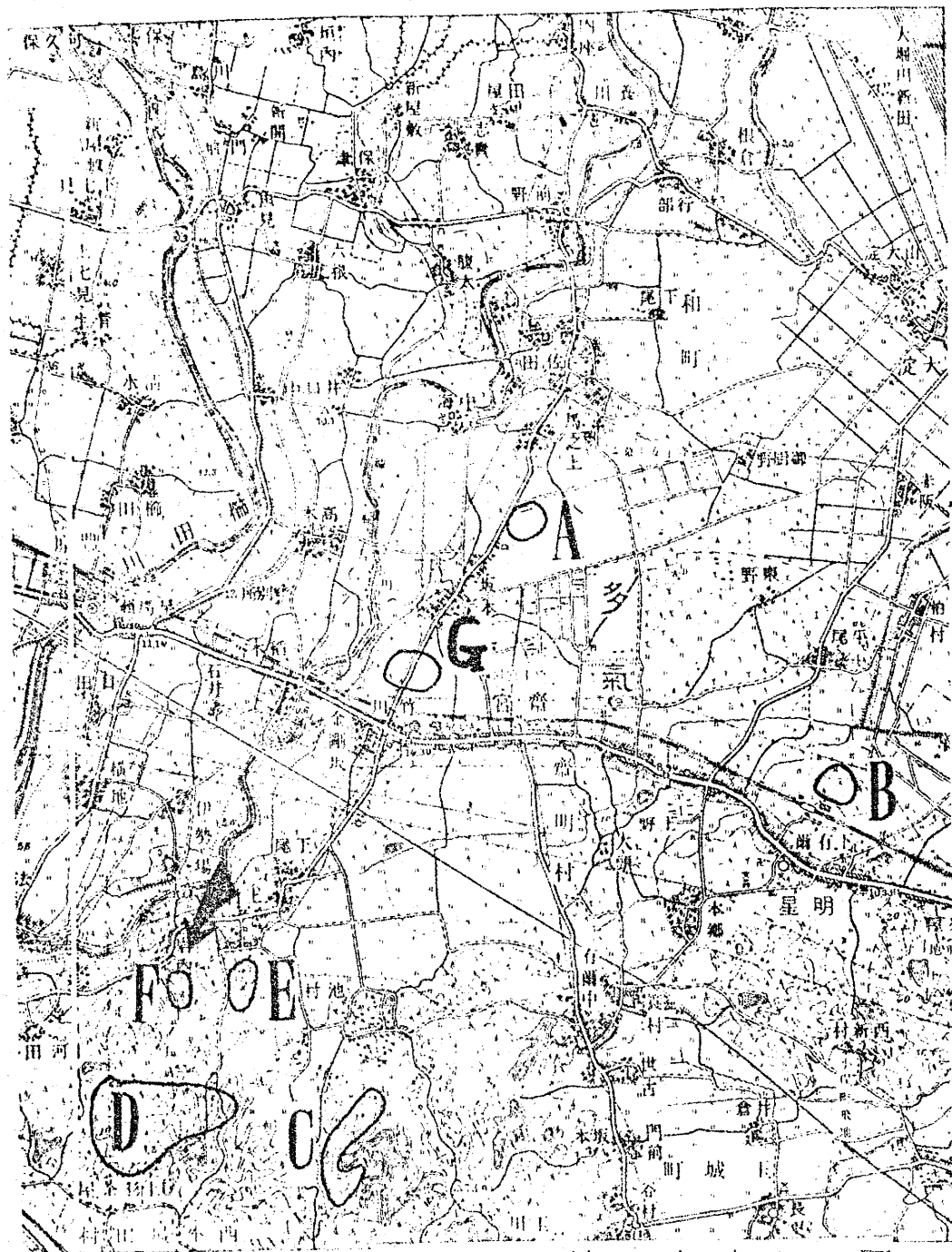
表一 2 神前山周辺古墳群円墳規模表

		10m以下	11~15	16~20	21~25	26~30	31~35	36~40	41~45	46以上	その他	計
	神前山	10	10	2	1							23
A	坂本	1	2	2							前方後円墳1基	6
B	明星	8		1							前方後円墳1基 不明1基	11
C	春宮池	2	5	6	2						前方後円墳1基	16
D	池上村	12	21	3							方墳1基 不明1基	38
E	天皇山		13	6		1	1			1	前方後円墳1基	23
F	大塚		10	5						1		16
G	塚山		8	3	1							12
		33	69	28	4	1	1			2		145

多気郡明和町大字上村小字山シバ

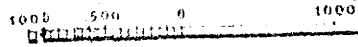
# 神前山古墳





五万分之一之尺

多氣郡神前山古墳周辺図



常吉氏及び地元の方々並びに『近畿古文化論攷』（伊勢湾沿岸の縄文帯神祇録について）の著者澄田正一氏に対し、ここに感謝の意を表する次第である。

（敬 部）

註

- ① 前記以外の参考文献として、『三重県遺跡地名表』（三重県史研究會古代史部會編）『三重県埋蔵文化財包蔵地一覽表』（三重県教育委員会）『河谷の歴史』（藤岡謙次郎氏）『桃華堂古鏡図録』（富岡謙蔵氏）『漢鏡選集』（本願郁賢氏）『古鏡聚英』（後藤宇一氏）『三重県古墳出土鏡目録』（三重県古墳出土鏡一覽）（真田幸成氏）等がある。
- ② 昭和三十四年『伊勢湾周辺総合学術調査』
- ③ 三重県教育委員会『三重県埋蔵地一覽表』（一九六四年刊）には四基が確認されている。

へ付 記

三重県主要古墳基本調査

- 1 筒野前方後方墳「ふびと」20号
- 2 明合方墳「ふびと」23号
- 3 西山前方後方墳「ふびと」20号
- 4 鎌切前方後方墳「ふびと」22号
- 5 高倉山巨石墳「ふびと」24号
- 6 向山前方後方墳（一九六五年一月）